

氏 名 米田 達明  
学位記番号 医博乙第241号  
学位授与年月日 平成18年3月20日  
審査委員 主査 教授 木下 芳一  
副査 教授 藤田 委由  
副査 教授 齊藤 洋司

### 論文審査の結果の要旨

進行期膀胱癌の治療には膀胱全摘除術が必要な場合が多い。従来膀胱全摘除術後には回腸の一部を導管として用いた尿路変更手術が用いられていたが、患者の health related quality of life (HRQOL) は、大きく低下していた。申請者らは、自己回腸を用いて膀胱を再建する技術を開発し、膀胱摘出後に新膀胱を作製して経尿道的な定期的排尿が可能な手術を行っている。このような手術を行うことで実際に HRQOL がどの程度改善するかを明らかとすることは、術式の選択に重要な情報となるため、申請者は新膀胱作製手術を受けた例と従来回腸導管手術を受けた例、および平均的日本国民の HRQOL を比較することを目的として研究を行った。まず申請者は 1996 年 11 月から 2000 年 1 月までに新膀胱作製手術を受けた 37 例のうち評価可能な 32 例と、手術時の年齢、性別が同じ 30 例の回腸導管手術例の手術後の HRQOL を比較した。HRQOL は Sickness Impact Profile questionnaire 136 項目のうち関係の深い 65 項目の質問票を用いて判定した。その結果、新膀胱手術を受けた例は回腸導管手術を受けた例より HRQOL が有意に高かった。次いで、1996 年 11 月から 2003 年 6 月までに新膀胱手術を受けた 75 例のうち、48 例を対象として SF-36 と Functional Assessment of Cancer Therapy (FACT) を用いて、新膀胱手術を受けた例の HRQOL スコアと国民標準値との比較をした。その結果 SF-36 を用いて測定した HRQOL に国民標準値と差がほとんどないこと、FACT を用いた解析で尿失禁の頻度によって HRQOL スコアに差がみられないことが明らかとなった。本研究によって膀胱全摘除術後の新膀胱による再建手術は、HRQOL を高く保つために有用であったことが明らかとなった。